

第 19 回 龍頭が滝案内

「暦(こよみ)と、松笠の暮らし(その 5 江戸時代の田植えは6月。)」

暦が、江戸時代の生活の中で(特に農作業で)、どのように使われていたのかを知るために、「嘉永三戌年農業手配」という資料を読みます。

この資料の作成者は、戸谷源八。寛政4(1792)年、意宇郡大谷村(現在の松江市玉湯町大谷)生れ。明治5(1872)年没。大谷村一番の豪農である、戸谷家の6代目として生まれた源八は、終生農業改良に努力し、彼の稲作技術に関する著書は、松江藩にも取り上げられ、藩内に広められました。間接的ですが、彼の残した資料で、江戸時代における、松笠の農作業の姿を想像してみましょう。

下に、資料の前半部分を掲げました。(説明のために番号、傍線をつけました。)

まず、①「嘉永三戌年」は、1850 年。②の「二月二五日」は旧暦で、新暦では4月7日。⑤の「同八日」は三月八日で、新暦4月 19 日ですので、種籾を水に漬けてから12日後に、⑥種まきの予定だったことになります。二回に分けて苗代を作ったらしく、「壺番苗代」、「二番苗代」とあります。

そして、種まき後、⑨47 日目に当たる⑩「四月二四日」から、⑪田植えが始められたようです。この日は、新暦では6月4日。江戸時代は、6月に田植えだったんですね。

よく見ると、③「三月節二三日」(これは、「清明」)、④「土用六日」(雑節の「土用」)、⑦「三月中九日」(これは、「穀雨」)、⑧「八十八夜廿一日」(雑節の「八十八夜」)、⑫「五月節廿六日」(これは、「芒種」)、というように、二十四節気と雑節が、節目節目に記されていて、しかも、いずれの月日も暦本とぴったり一致する、正確なものです。二十四節気と雑節は、農作業には、必要不可欠なものだったことが伺えます。

もう一つ、②、⑥、⑪「但吉日を撰(選ぶ)」とも記されています。農作業には、日にちや方角の吉凶も重要だったのです。(以下次回に続く。絵は苗代の図。農林水産省 HP より。)

一 同五日	水溜
一 同四日	貫留
一 五月朔日、二日、三日	撻配
一 ⑫ 五月節廿六日	
一 同廿六、七日、八日	山田植
一 ⑩ 四月廿四日	⑪ 但吉日を撰 早植
一 ⑨ 四十七日目	
一 ⑧ 八十八夜廿一日	種蒔
一 同廿日	苗代踏
一 同十九日	種揚
一 同十七日	種漬
一 三月八日	二番苗代
一 ⑦ 三月中九日	先種を蒔んと思時ハ田植時を考知るへし
一 ⑥ ただし吉日を撰土虫地虫除之 種蒔	
一 ⑤ 同八日	
一 同七日	苗代踏
一 ④ 土用六日	
一 三月五日	種揚
一 ③ 三月節二三日	
一 ② 二月二五日	但吉日を撰種撻種漬
一 壺番苗代	
一 ① 嘉永三戌年農業手配	

